

人物で語る 日本デンマーク

⑬ 岩瀬和市Ⅲ

安城市において屈指の総合病院となっていた更生病院は、一九三五年（昭和一〇年）二月に、碧海郡購買販売組合連合会（通称丸碧）が経営する施設として建てられた。

農村不況が続く中でも丸碧は鶏卵の共同出荷を中心に発展を続け、一九三三年（昭和八年）には十萬円の過剰資金がでるほどであった。当時の丸碧会長岩瀬和市は、これを生活必需品の製造か組合病院の経営に充てること望ましいと考え、師と仰ぐ山崎延吉（のぶきち）に相談した。その結果、山崎は「農民生活で最も経済をおびやかすものは傷病であり、健康をはなれて幸福なく、組合病院をもうけて、組合員にすぐれた近代的医療サービスをすべきである」という意見を入れて、日本デンマークにふさわしい組合病院の設立に向けて事業は進められることになった。

丸碧臨時総会で組合病院が決議されると、和市はその日の内に安城町長岡田菊次郎を訪ね、病院敷地として旧町役場跡地千五百坪の

無償貸与を申し入れた。建物は本館二階建六百坪、病室三百坪で、建築費十二萬円という、碧海郡唯一の総合病院（内科・小児科・外科・産婦人科・眼科・耳鼻咽喉科・レントゲン科）であった。「更生」という病院名は、農村の自力更生を目的としてつくられたことから、山崎延吉によって命名された。

同病院の特徴は、組合からの補助による医療費の安さと、その支払いが所属組合の預金口座から引き落とされるシステムをとっていたことである。医療費の安さについては、開設の年の十月、賀川豊彦（かがわとよひこ）（キリスト教社会運動家）が更生病院開設記念講演会で「碧海郡の医療組合病院のごときは入院して病室を借りる。一日たった三十銭である。親子どんぶり一つ食べても三十五銭となります。これなら私は入院したい」と演説したほどであった。また、支払い方法も農村不況のなか、現金収入が乏しく、富山の売薬が唯一の治療方法であった農民にとつて、現金支払いの心配なく治療が受けられるということの恩恵は大きかった。



▲開設当時の更生病院

また、開設の翌年からは二台の巡回バ

スが碧海郡内を一日一コース往復するようになって利用圏はさらに拡大され、開設一年で十万人を超える人々が利用した。しかし、それでも病院の経営は赤字続きであった。その赤字を、販売事業の利益で補てんすることで病院の経営は続けられた。

更生病院は、日本デンマーク時代を代表する施設で、農村医療のセンターとして碧海郡の住民が、安心して病気の治療を受けることができる農村福祉の一つの頂点に立つものであった。

一九四二年（昭和十七年）、山崎延吉は全国から三十五人の農民を選んで『昭和の義農』を著した。そのなかの一人に岩瀬和市をあげて、「つとに産業組合の必要を知ってこれに関係し、古井の組合に、成績を上げたのを出世の初めとし、遂に中央の人達にも認められるようになった。彼は碧海郡の産業組合連合会を主宰するや、碧海郡の卵を東京に出荷して丸碧卵として当年の江戸八百八町に流布せしめた。彼は、組合病院の必要を認むるや、万難を排してその開設を計って今日あるに至らしめた」とし、「彼は信ずるところを行うに忠実であり、責任を背負って果敢なやり方をなすは、他の追従を許さぬものがある」と評している。

岩瀬和市は一九八五年（昭和六〇年）四月一七日に永眠する。享年九十三歳であった。

文 大見 功